

今回は、秋から冬にかけての会員各校の研究発表会の報告等をお届けします。

第18回東北小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会 宮城大会in仙台

『夢と希望をはぐくむ生活科・総合的な学習の時間』

—子どもの思いや願いを大切にしたい単元、授業づくりを通して—

大きな紙を前に次から次へとカードが貼られていく。

「介護士さんは『大変だけれども、ありがたいと言われるとうれしい。』と言っていたよ。これはやりがいに入ると思う。」
「『地域の皆さんの困っていることを聞きたい。』と言う町内会長さんは工夫や努力に入ると思うよ。」

友だちのつぶやきをその場でカードにメモして区分けしている子もいる。声を出さない子は部外者かというそうではない。友だちのカードと自分のワークシートを見つめ、その後、代表で発表をしている。タイミングを見計らい、教師は意見をまとめ、みんなで共有化していく。このような学習風景が広瀬小の全ての学級で展開されていた。

未曾有の大震災から9ヶ月の12月。町が泥の中に埋もれたままの現状の中、仙台の広瀬小には日本中からたくさんの参加者が集い、熱気ある各分科会、講演会が展開された。シンポジウムも、今回はパネリストがボードに提示されたテーマにそってメッセージを書くという趣向で、会場も問題を共有化でき、楽しかった。

幼小連携の1年生スペースでたくさんの参観者を前に堂々と発表していた1年生の姿。自分が育てた野菜についてうれしそうに説明していた2年生の姿。モダンな校舎の廊下スペースいっぱい、まるで写真の中から会話が聞こえてきそうな掲示物が貼られ、総合的な学習が共有化されているのが印象的だった。

本時案の中に「おおむね満足と判断する児童の姿」「努力を要する児童への指導、支援の手立て」が具体的に書かれてある。これがこの研究を支えている要素であろう。地道なこの「グループモデレーション」的な作業をやるかやらないか、広瀬小、東北個性化研の先生方のパワーの源はここにあるのだろう。広瀬小での生活科・わかばタイムの学習経験を経たあの子たちは将来きっと仙台のみならず、どこであろうと復興や町づくりの担い手になってくれるだろう。

(千葉・加藤)



緒川小学校・拡大授業研究会に参加して

現在も緒川小学校では、子どもたちの自己学習力の育成に取り組んでいる。数ある学習の中でもこの「週間プログラム学習」は自己学習力を育成する要といえる。学力を狭い意味でとらえるのではなく、計画する力、集中して追究する力、状況に応じて変更する力、自己の学習を振り返る力など広い意味でとらえている。私はその「週間プログラム学習」を参観した。

ホールや4年コーナーでは、4年算数「直方体と立方体」・社会「県の人々の暮らし」の2教科同時進行の「週間プログラム学習」が授業公開されていた。

広いホールでは、調べたことをもとに「スゴロク作り」「パンフレット作り」が展開されていた。何度もファイルをのぞき込み確認する子、調べたことをプリントにまとめる子、進度は違うが、自分のペースで各の課題を一人学びで進めていた。

ラーニングセンターには、一人一人の姿を思い描いて作成され準備された様々な学習材やプリント類。この学習に懸ける教師の努力の意気込みが感じられた。また、教師のチームワークぶりもその用意周到ぶりからもうかがえた。

その後の分科会では、個別学習部会に参加した。ここでは「週間プログラム学習」のよさについて話し合われた。「2教科同時進行であるため、自分の興味ある教科に時間をかけることができる」「自分のペースで学習を進めることができるため、じっくり課題に取り組むことができる」「ラーニングセンターにある学習材を納得のいくまで活用することができる」との意見が出された。「週プロを作成する教師は、自分の苦手な教科を作ってみるとよいのでは。すると子どものつまづきにも気付くのでは」と佐野先生。また、「6分間にのべ20人の子どもと関わっている」など個別支援の手厚さについても述べられた。子どもも教師もこの学習を楽しみと感じている。寒い日であったが、この学習に懸ける熱い思いが伝わってきた1日であった。

現在私が勤める東浦町の中学校でも、数年前から単元内自由進度学習に取り組み始めている。中学校では、教科担任制なので2教科ではまだ実施していないが、1教科でも2単元同時進行で試みている。例を挙げると、体育「保健」「マット運動」、美術「立体製作」「鑑賞」、理科「動物のからだ」「人体」などである。学習を進める生徒の姿からは、今回参観した小学校での同様な姿が見られ、生徒からは、小学生と同じような感想を聞くことができる。

小学生ができるこの学習。中学生でできないわけがない。そう感じたのは私だけではないはずだ。緒川小学校の先生方から大きな勇気を頂いたひとときでもあった。(東海・鬼頭)

石浜西小・拡大現職全体会～エラいからこそ、攻めの教育～

「拡大現職全体会」とは、公開校内授業研のことを意味する。一般的な校内研と違うとすれば、外部からの参加（他校の教員、大学研究者、教育学部の学生など）を見越して全学級の授業を公開しているところだろうか。大学附属小学校や研究指定校などでは、こうした公開校内研を行うことがあるが、石浜西小は附属でも研究校でもない。公立の、しかも、かなりエラい（愛知では「しんどい」ことを「エラい」という）学校である。

エラい学校で、どうしてそのようなエラいこと（全学級公開授業）をわざわざするのか。石浜西小のことを知る先生の中には首を傾げる人もいる。これに対して研究主任は「エラいからこそ、公開することで私たちは活力を得ている」と答える。当日の公開授業は、3年生以上が「〇〇学習」と呼ばれる2

教科同時進行単元内自由進度学習であった。子どもが校内の様々な場所で課題に取り組んでいる。うまく取り組んでいる子どももいれば、途中で集中の切れる子どももいる。ありのままを公開した授業後の検討会では、学級担任全員が前に座り、〇〇学習における単元の選定やコースの工夫、学習材づくりの苦労などについて自分の言葉で語り、参加者から「子どもがちゃんと学習しなかったらどうするのか」といった質問に、〇〇学習で子どもたちが学ぶ楽しさや達成感や自己充足感を味わう機会を得ていることを、体験を交えて話していた。こうした質問に答える中で、石浜西小の先生たちは少しずつ自信をつけているように見えた。また、参加者の質問や意見から、自分の実践の無自覚な部分に気づくことができたり、子どもの行動の意味や価値づけについて考えてみたり、日常接している中で見過ごしていたものを知ることができ、それを前向きに受けとめ、楽しんでさえいるようにも見えた。何より、子どもが頑張っている姿を褒められた時は、子ども以上に喜んでいるのは先生たちだった。エライ中で掴んだ確かな手応えは、心の大きな支えになるのだろう。石浜西小は「攻撃は最大の防御なり」を地で行く学校だと私は思う。

(東京・佐野)

板橋個性化教育ルネサンスへ：板橋区立大谷口小及び板橋第一小での取組について

2010 年度から板橋区教育委員会の指導室長に中川修一先生が就任されたことが、同区の二つの学校における個性化教育の取組が始まる最初の契機だった。中川先生は、台東区立根岸小時代に中澤米子先生と共に研究をされ、会長の加藤幸次先生のご指導を受けた方である。指導室長に就任された年度半ば、まず加藤先生に同区授業改革の指導に関して打診され、同年 10 月個性化教育学会の事務局会議の際に 2 名の指導主事の方とご挨拶に来られて、そこで初めてお会いした私が、その後の取組に主に関わることになった。

ここで特筆すべきは、かつての全個連会長・染田屋謙相先生が教育長を勤められた時期に、オープン建築の学校として金沢小学校がその名を馳せ、個性化教育が精力的に展開された板橋区で、きわめて小規模ながら一種のルネサンスのように、今回のような取組が始まったことである。

大谷口小は、2008 年にオープン建築校舎に生まれ変わった学校で、こうした建築を十分に活かした実践を模索すべく、2011 年 1 月に研究がスタートした。さらに、同年 3 月から板一小でも新たな研究開始と相成った。板一小は、現在プレハブ校舎で改築の途上にあり、2013 年度からオープン建築校舎として再スタートを切る学校である。

今回の研究の特徴は、この二つの小学校が、単独だけでなく、合同でも授業研究を進め、年に数回の研究授業に相互乗り入れして参加し、教育委員会指導室とも協議を重ね、それを同一外部講師が担当するという形式を採っているという点にある。大谷口小は来年 2012 年 11 月 23 日に、板一小は 2013 年度に公開研を予定し、それに向けた研究を進行中で、徒歩で 30 分程度の距離にある学校同士の合同研究は不便さを伴うものの、現在のところ、二校合同だからこそ持ちうる利点が目立っているように思われる。

ともあれ、両校とも、建築にしろ、この研究にしろ、外部講師にしろ、各々が自発的に選んだものではなく、全て上から降ってきた、つまり、教育委員会から与えられた諸条件だっただけに、研究開始当初の空気はかなり重かったことを明確に記憶している。その大きな転機となったのは、今年度 2 学期に両校それぞれ低学年で実施されたコース別自由進度学習（2 年算数）の実践だった。選プロ経験者など誰もいない中で、しかも他校でも類を見ない低学年での自由進度学習の実践だっただけに、準備は大変だったが、担当された先生方の努力が結実し、それが子どもたちの姿や声としてまざまざ

と表現されたことで、それまで半信半疑だった先生方も強い印象を受けられた様子が伺われ、学校全体の空気に劇的な変化が生じた。結局、教師を変えるのは、子どもの姿なのだ。

この変化に伴って、両校とも、同じ2年で3学期に大谷口小では再度算数、板一小では国語でコース別自由進度学習が実践されただけでなく、大谷口小5年と板一小3年の社会でコース別学習が、さらに、板一小5年では、とうとう二教科同時進行単元内自由進度学習（理科と社会）が展開されるといふ、指導室長中川先生も驚かれる変貌ぶりとなっている。何より、大変大変とおっしゃりつつ、そこそこ楽しそうに、このような実践に取り組まれている両校先生方の様子が徐々に増えてきつつあるのは間違いない。

が、まだまだ課題も多い。板橋個性化教育ルネサンスは、まだ端緒についたばかりである。今後とも、学会の先生方のお力添えを切に願う次第である。（東京・澤田）

原当麻・教育支援センター「コスモス」開設のお知らせ

NPO法人「日本個性化教育振興会」に属する、川島良代（東京）と館岡茂樹（神奈川）が、社会貢献の一助になればと、平成23年11月に原当麻・教育支援センター「コスモス」をNPO法人の加盟第1号として開設しました。事業内容は、以下の6つです。

- ①学習塾（個別の学習支援）
- ②教育相談（子育て、子どもの学習や生活の相談）
- ③フリースクール（不登校、引きこもりのサポート）
- ④放課後支援（計画的で楽しく充実した放課後）
- ⑤週末、長期休業中の支援（自主自立、個性伸長）
- ⑥教育セミナーや研修会の開催

NPO法人「日本個性化教育振興会」

原当麻・教育支援センター「コスモス」【加盟第1号】

Tel・Fax 042-711-9143

e-mail cosmos@ark.ocn.ne.jp

〒252-0035 相模原市南区下溝603-10（相模線・原当麻駅より川沿い徒歩5分 水色の建物）

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013

埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048(678)1681

e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ

<http://koseika.com/>

日本個性化教育学会 第14号

平成24年2月12日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 中田 泰志